

幕末期薩摩藩をめぐる諸藩の探索活動

— 文久二〜三年、薩英戦争前後を中心に —

—The Information collection activity of neighborhood feudal clans
concerning Bakumatsu period Satsuma Domain—

大賀 郁夫

キーワード

情報 生麦事件 英国艦隊 高岡外城 都城 清武

目次

はじめに

一 生麦事件後の情報収集活動

(一) 薩摩藩の情報収集活動

(二) 飢肥藩による情報収集活動

(三) 延岡藩宮崎役所による情報収集

二 薩英戦争をめぐる情報収集活動

(一) 飢肥藩による情報収集活動

(二) 延岡藩宮崎役所の情報収集活動

三 都城島津家からの聞合

結びにかえて

文久期以降、異国船渡来の危機・緊張感が高まり、諸藩は領内のみならず近隣幕領も含めた海岸防備強化が要請された。文久二年八月に起きた生麦事件の賠償問題を薩摩藩と直接交渉するため、翌三年六月、英国艦隊が鹿児島に渡来して危機が現実となる。七月二日に始まる薩英戦争について、藩境を接する飢肥藩・延岡藩がどのようにしてその情報を入手したのかについて検討した。

飢肥藩では平部嶠南が、飛脚や商人をはじめ、幕府儒官安井息軒や嶠南と同門の薩摩藩士たちから、また延岡藩でも飛脚や高岡外城郷士たちからタイムリーで詳細な情報を入手していた。また都城家も薩摩藩私領主として、薩英戦争について詳細な聞合活動をしていたことを明らかにした。

情報ルートとして、鹿児島―都城―高岡―佐土原ラインが機能しており、特に高岡が情報発信の拠点であった。高岡とは飢肥領清武や延岡領宮崎などと日頃から交流が盛んであり、情報交換と共有がなされていた。情報共有を通して藩境を超えた情報ネットワーク圏が形成され、新しい地域社会が成立しつつあった。

はじめに

近世における情報収集やそのネットワークの形成についての研究は、一九七〇年以降数多く発表されるようになった。研究視点は大きく二つに分かれる。その一つはメディア史のなかでかわら版や随筆類を用いて情報社会の近世的特徴を捉えようとしたもので、もう一つは情報とそれが伝達されるコミュニケーションのあり方を通して、ネットワークの形勢を解明して地域文化を多面的かつ具体的に明らかにしようとしたものである⁽¹⁾。

幕末期における諸藩の情報収集活動については、幕府情報は諸藩の留守居相互間のもとより、城使による江戸城内での情報交換、御城坊主や大目付・江戸町奉行所・勘定奉行筋、浦賀奉行や通事など、さまざまな情報ルートを駆使して情報を入手していた⁽²⁾。あらゆる方法でできる限り多くの情報を収集することが、藩の取るべき立場を決定する重要な判断材料になったのである。特に、財政窮乏に喘ぎ軍事力の増強もままならない中・小藩にとって、幕府や大藩の動向に対する情報収集は、まさに藩の方針決定を左右する最重要課題だったに違いない。

幕末期の薩摩藩が行った情報収集活動については、宮地正人氏⁽³⁾や芳即正氏⁽⁴⁾、町田剛士氏⁽⁵⁾などの研究があり、幕末期の薩摩藩がトップレベルの情報収集能力を有していたことが明らかにされている。こうした薩摩藩側の研究に対して、周辺諸藩が薩摩藩にどのような情報収集活動を行ったかについての研究は、管見の限りではほとんどないと言ってよい。

そこで本稿は、文久二年以降異船襲来の危機が高まるなかで、生麦事件から薩英戦争⁽⁶⁾に至る一連の薩摩藩の動向に対して、周辺中・小藩がどのような情報収集活動を行っていたのかを明らかにすることを課題とする。

今回情報収集を行った周辺藩として取り上げるのは、薩摩藩領と藩境を接する日向飢肥藩と同延岡藩である。薩摩本藩領および都城領と藩境を接する飢肥藩(伊東氏)は、日向国那珂郡・宮崎郡を領する表高五万一〇〇〇石余の外様小藩である。伊東氏は戦国期を通して島津氏と敵対関係にあり、近世前期にも寛永四年から延宝三年にかけて約五〇年間にわたり争われた牛の峠・北河内論山や、元禄国絵図作成をめぐる対立など長く緊張関係が続いたが、宝永四年に薩摩藩から和談の申し入れがあり成立した⁽⁸⁾。飢肥藩では清武地頭所や赤江川河口の城ヶ崎町など、他領との接触が頻繁な地域を中心に情報探索網が張られていたが、そこからの情報が用人平部崎南の元へ届けられた。今回は飢肥藩の情報収集について、平部崎南の著した「六郷荘日誌」からみていきたい。「六郷荘日誌」一三冊は『日向地誌』の撰者平部崎南(慶応三年に家老)が編述した、天保四年から明治十二年に至る編年記事である⁽⁹⁾。

一方延岡藩は、城附日向国臼杵郡と飛地宮崎郡、および豊後大分・速見・国東郡の一部を領する表高七万石の譜代中藩(延享四年以降内藤氏)である⁽¹⁰⁾。延岡藩では飛地支配のために宮崎郡・大分郡に役所が置かれていたが、薩摩藩を中心としたその周辺諸藩の情報収集活動を担ったのは、飛地宮崎郡に置かれた宮崎役所である。延岡藩領宮崎郡二一村は、大淀川を挟んで北岸に大島組と

瓜生野組、南岸に太田組・跡江組に分けられ計二万四六九五石余であった。⁽¹¹⁾北は佐土原藩領、西は高鍋・薩摩藩領、南および東は飢肥藩領と幕領に囲まれていた。宮崎役所では、各組大庄屋や村役人および飛脚や郷士などを駆使して諸藩、特に薩摩藩の探索を行っていた。⁽¹²⁾

一 生麦事件後の情報収集活動

(一) 薩摩藩の情報収集活動

文久二(一八六二)年八月二十一日、帰洛のため江戸を発った薩摩藩国父島津三郎(久光)の行列を避けなかったとして、遊行していた英国人四人が横浜の生麦村で薩摩藩士に殺傷される事件が起こった。世に言う生麦事件である。上海より来日していたリチャードソンは即死、貿易商人マーシャルとクラークは腕や肩を着られて逃走、香港英商の妻ボラデルのみ無傷で脱出し、事件を横浜居留地に報じた。⁽¹³⁾

八月三〇日、英国代理公使ニールは事件解決のため老中と会談しているが、老中はきわめて頼りない返答しかできず、幕府がこの事件に対する適切な処置を行えなかったことは、幕府の「日本政府」としての権力の欠如を暴露した。⁽¹⁴⁾

鹿児島に生麦事件の発生、および英国が鹿児島に艦隊を派遣する可能性があるという情報は、閏八月二十八日、久光の使者松方正義によってもたらされた。⁽¹⁵⁾国父久光は、同月二十三日に京都を発って鹿児島に帰国した。京都では改革派廷臣や長州藩が朝議を

支配するなど、久光が勅使大原重徳に随従して江戸に下った時とは状況が大きく異なっており、それに久光が失望したためとされているが、英国の動向によるとの指摘もある。すなわち、八月二十六日に久光に対して幕府が英艦が鹿児島に向かうかも知れずと急報したため、憂慮した久光は逸早く帰藩したという。⁽¹⁶⁾帰藩した久光は英国の来襲に備え、直ちに武器・弾薬の手当、台場の築造に努め、十一月十六日には藩主忠義とともに沖小島や桜島の台場築造工事、集成館の大砲铸造などを視察している。⁽¹⁷⁾

十二月十三日に御殿山英国公使館が長州藩士によって焼き討ちされたことから、ニールは強大な海軍力をもって日本近海に出現する緊要性を確信し、翌年二月十九日、軍艦八艘を横浜に入港させた。⁽¹⁸⁾二十一日、ニールは幕府に謝罪と一〇万ポンドの賠償金を要求し、薩摩藩には犯人の逮捕・斬首と二万五〇〇〇ポンドの賠償金を要求した。⁽¹⁹⁾二十四日、政事総裁職松平慶永は薩摩藩京都留守居本田弥右衛門にイギリスの要求を伝えている。⁽²⁰⁾

文久三年になると、尊攘激派が優勢となる中央政局での勢威挽回を願って、近衛忠熙・忠房父子、中川宮、一橋慶喜らからの督促、また朝廷からも久光に早期上京の勅命が発せられた。⁽²¹⁾しかし久光の最大の関心は英国艦隊の動向、すなわち英国艦隊が実際に鹿児島に来るかどうかであり、久光の上京はそれ次第であった。薩摩藩ではあらゆる手を尽くして情報収集に尽力した。主な情報源は長崎に派遣されていた薩摩藩士たち、山本友輔・八木弥平・中原猶介・五代才助たちである。彼等は長崎聞役をはじめ、長崎に在留するイギリス人やオランダ人からも情報を収集しているが、お

おかたは来襲に否定的で、今しばらくは猶予があるとの報告であった。⁽²³⁾

二月十九日、久光は上京を決意し、三月四日に鹿児島を発った。久光が乗船した蒸気船は、悪天候のため翌五日に飢肥藩領外浦に入津した。飢肥藩ではいよいよ異国船の来襲かと大騒ぎになったが、久光一行だという事が判明した。八日までに出帆できなければ上陸して陸路を通行すると、休泊や人馬の手配を頼談され、宿割のため薩摩士八人が城下本町に遣わされたが、九日天候が回復したため三艘の蒸気船は漸く外浦を出帆した。⁽²⁴⁾

三月十四日、久光一行は入京したものの、わずか四日滞在しただけで十八日には大坂へ退き、二十日には帰藩の途についた。攘夷強硬論者の「暴説」と「暴説御信用之堂上方」が京都の政局を圧していたことに対して、久光が失望したためだといふ。⁽²⁵⁾ 久光は伏見到着時に英国が艦隊を派遣して、薩摩藩と直接交渉することを知らされており、英国の動向が主因による帰藩であったといえよう。⁽²⁶⁾

薩摩藩が要求を受け入れないことから、ニールは六月二十二日、艦隊七艘で横浜を出航し、同二十八日朝、鹿児島城下前の前の浜に到着するのである。

(二) 飢肥藩による情報収集活動

「六郷荘日誌」には、文久二年四月十三日は会所寄合定日であったが、嶮南は病気のため出頭しなかったとある。夕方に清二左衛門が抱膝庵⁽²⁷⁾に来て言うには、今日用人の佐土原織部が密かに次の

ような話をした。一昨日延岡から井上清兵衛が内命を受けて来藩し、江戸からの知らせで京都表では外国との交易に天皇が「御逆鱗」し、近日中に大諸侯五侯に夷船打払の諭旨を下したとの報知があった。薩州には兵糧の用意に油断なく、兵士二〇〇余人が赤江河口から乗船して上京した。肥後藩も先日は夜中に大砲を鶴崎まで運んだとの風説があり、世上不安である。万一京都と江戸と二つに分かれて合戦あるときは、飢肥藩はどちらに組するかの内意を得るための訪問らしい。

当飢肥藩では未だそこまでの考えはないが、隣国ではすでにこうした話があるのであれば、内密に肥筑の事情を探るべきである。このことを嶮南に相談しなかったが、寄合には欠席であったため報告せよとのことなので来訪したという。ほどなく佐土原織部の子息純助も来たので、隣国探索の都合を相談したとある。

すでに他藩では、合戦時には幕府方が朝廷方かどのいずれに荷担するかの議論があり、飢肥藩では隣国に早急に探索を入れる必要性を強く意識することになる。なお、他藩から使者が派遣されて直接的に「朝廷か幕府どちらにつくか」という重要機密問題を問いつ糾していることは重要である。実際に延岡藩では、飢肥藩のほかに竹田や熊本へも家臣を派遣して、薩摩藩の動向やその他の情報交換などを頻りに行っている。⁽²⁸⁾

文久二年三月十六日、薩摩藩国父島津久光は藩兵約一〇〇〇人を率いて鹿児島を出発し、四月十六日に京都に着いた。同月二十五日、都城へ久光からの上京要請が伝えられ、家老北郷資雄以下約三〇〇人が鹿児島へ出発した。領主島津久静ら都城部隊は、

五月四日前の浜から天祐丸で出帆し、西目廻りで瀬戸内海を經由して同月十三日に着坂した。⁽²⁹⁾

この時の経緯については、清武にいた阿萬豊蔵が五月二日付の書翰で平部に報じている。⁽³⁰⁾

一兩日前、上恒久村ノ莊屋川越六左衛門、用事アリテ高岡ノ年寄志賀清右衛門ニ人ヲ遣シケルニ、清右衛門宅ニテ都ノ城ヨリノ回章ヲ読ミ候フニ、去月二十五日薩摩ノ蒸気船大阪ヨリ三日ニノ鹿島ニ下着シ、都ノ城ノ領主嶋津豊後本姓本郷氏兵士二百五十人ヲ率シ急ニ京都マテ出張、合戦ノ催アリト申ス事ノ由、使ノ者ハ外ヨリ立聞致シ候ヘハ慥ニハ分リ兼候ヘトモ、大抵相違ナキコトユヘ、取敢ヘス申上候ナリト

情報の出所は高岡の郷土年寄志賀清右衛門である。高岡は日向国内の薩摩藩領では最大規模の外城で、綾・倉岡・穆佐とともに去川関・紙屋関以東の他領境に接する「関外四か郷」の一つであった。⁽³²⁾

飢肥藩領上恒久庄屋である川越六左衛門と清右衛門がどのような関係にあったかは不明であるが、清右衛門宅で都城からの回章を閲覧していることから、常日頃から昵懇であったと思われる。その回章によると、大坂からの薩摩蒸気船が去月二十五日に鹿児島に下着したこと、都城領主島津豊後（出雲のち石見）が兵二五〇人を率いて上京したことなどが分かり、「使ノ者ハ外ヨリ立聞致シ候ヘハ慥ニハ分リ兼」と断りながらもかなり正確な内容であった。

三日に鹿児島から帰ったという飛脚の湯前弥八が言うには、去

る二日、島津豊後の手勢二五〇人と鹿児島島の兵士三〇〇人が蒸気船に乗船して京都に登ったという。かなり正確な人数である。ほかに四〇〇人は京都からの報知があり次第上京するとの布告があり、「如何ニモ平穩ナラサル形勢」と報告している。⁽³³⁾

五月七日には、熊本へ探索のため派遣されていた清二左衛門と稲津済が帰帆藩し、探索書が提出された。熊本からの探索書によると、島津和泉（久光）が江戸出府の途中で京師に足止めされ、江戸から下向して京師に滞在していた長州藩世子（毛利定広）や中山大納言（忠能）らと日々密談したこと、諸国の浪士たちがぞくぞくと京師に集まり、勤皇攘夷を唱えているということであった。⁽³⁴⁾これは四月十六日に京都に参着した久光の動向についての報告であるが、周知のように久光は五月二十二日に大原重徳勅使とともに京都を出発するのであり、飢肥に伝えられたこの肥後探索書は直ちに仲萬儀右衛門によって江戸へ送られた。⁽³⁶⁾なお、どのようなルートで入手したかは不明であるが、四月十六日に近衛忠熙邸で久光から提出された意見書の写しが飢肥にとどけられている。⁽³⁷⁾

同月二十九日には、中老佐土原織部と用人田原文内を急ぎ出府させることを会所会議で決定し、六月九日には稲津済と佐土原省吾を京坂間に周旋し、時情を探索するために上京させている。⁽³⁸⁾六月三日に豊後竹田に派遣されていた阿萬豊蔵が十七日に帰郷して探索書を提出し、二十一日には大坂留守居横山斧助が江戸での布告書を送り下して、幕政改革に関する建言が伝えられた。⁽³⁹⁾

このように、飢肥藩では薩摩藩の動向を探索すべくあらゆる手

を尽くしているが、特に江戸からの貴重な情報は、江戸で三計塾を開き文久二年には幕府儒官になった安井息軒からの書翰によるものであった。五月十三日付の仲平(息軒)から安井林平宛の書翰内容は次の通りである。⁽⁴⁰⁾

去辛酉年ヨリ長州侯毛利大膳大夫公武合體ト申ス義相企テ、肥後・薩摩ナトニモ使者ヲ以テ申シ入レ、當春永井雅楽ト申ス者上京、種々取計ヒ候フ内、四月十三日薩州侯父島津和泉天子ヨリ此度三郎ノ名ヲ賜ヒ從四位下ニ叙セララル伏見へ參著致シ、雅楽八十四日京師発足二十五日當地へ著府致シ候、和泉伏見へ參著致シ候節、諸方浪人共待受ケ容易ナラ不ル儀申立テ候趣、近衛殿へ内内申シ入其趣叡聞ニ達、浪人共ヲ取鎮メ候廉ヲ以テ京師へ御差留メ相成、四月十八日京師薩州屋鋪へ入候、之依テ物議沸騰有志之人ハ彼是心配致シ候向モ之有ル由(後略)

書翰ではこの後、四月二十三日の寺田屋事件の詳細な経緯、一橋慶喜が將軍後見役、松平春嶽や松平容保の大政参与、有能な旗本の人材登用などを報告し、「誠ニ日出度御新政、恐レ乍ラ天下之大幸此事御坐候」と一連の動向を賞賛している。

此度之事西国筋別ノ騒キ候由、其地ナト定テ浮説甚數種々御心配被成候事ト存シ候、去乍兼テ申シ上ケ置キ候通り、老朽書状差上候迄ハ少モ御心配ニ不及候、以後左様御心得可被成候⁽⁴¹⁾

飢肥という九州南部に置かれた小藩にとって、大政の情報を入手できる「手筋」は限られており、江戸において幕府情報を入手で

きる息軒からの書翰はきわめて貴重であったに違いない。

このほか入手経路は不明であるが、嶮南は「此度関東ニテ御布告ノ一通」、および四月十六日付の「島津和泉此度天朝へ建白ノ書」⁽⁴²⁾、さらに稲津済と佐土原省吾らが京都で入手した「今上帝御宸翰」⁽⁴³⁾を書き留めている。

十月四日、江戸より諸大名の参勤を三年に一度とするなどの「將軍家庶政一新」の報知があったが、さらに同月十一日発の江戸安井息軒からの来翰があった。⁽⁴⁵⁾

(前略) 京師并附副居候西国諸家諸浪人杯、議論ハ御殿山横浜夷人御引払、兵庫界之両港御開キ之儀御止メ不相成候テハ迎モ御順熟致サ不ル勢御坐候、右通り之御応接相成候へハ、品ニ依英仏等ヨリ軍艦差向ケ候義計リ難ク、左候へハ何レ江戸海ニ乗り入り候ニ相違之有ル間敷、諸国人数モ被召寄度キ程ニ存シ候処、諸家参勤御緩メ相成リ、追々御暇出候由誠ニ寒心致ス事ニ御坐候、(中略) 然トモ時事之変化測難ク候、斯様六ツノ敷相成候世上ニ候へハ、御政事武備等御油断御坐候テハ相済ミ不申サ、万万一徳川家御威令相緩ミ候様成リ行キ候へハ、遠国之小諸侯第一番ニ其禍ヲ蒙リ候ハ眼前ニ御坐候、此所ヲ能々勘考被成、人材御举用土氣御引立、本ヲ務メ費ヲ省キ候類之事精々御世話被成度、是等之義ニ付テモ君公御帰国御坐無ク候フテハ相済不ル事ニ候故、折角其段相含ミ候ヘトモ、疎遠之微臣用立候筋之無浩歎ニ不堪候、其御地ニテモ此義呉々御謀被成候奉存候、頓首

九月晦日

安井仲平

平部良介様

御殿山から外国人たちを立ち退かせ、横浜・兵庫両港を鎖港したならば、場合によって英仏等が軍艦を指し向けるやもしれず、そうなれば江戸湾にも乗り入れることは必至だと息軒は見ている。また諸国から人数を集めるべきところ、逆に参勤制度を弛めて三年に一度にするなど寒心に堪えないと幕政を批判する。さらに時事の変化は予測しがたく、困難な世上であるから政事武備など油断なきように、万々一「徳川家御威令相緩ミ候様」になった場合、最初に「其禍」を蒙るのは遠国の小諸侯すなわち飢肥藩であると警告する。

十二月十八日の江戸からの来状で、このたび朝廷から攘夷の勅諭が下り、幕府もこれに遵奉するらしいことが伝えられた⁽⁴⁶⁾。諸外国との貿易が停止されれば、英仏等が大坂湾に軍艦を差し向けるという風説もあり、時勢が急迫していることは火を見るより明らかであった。嶮南は「六鄰莊日誌」に勅諭四通のうち二通を書き留めている。

余談ではあるが、江戸からの重要な情報発信者である安井息軒が儒者として幕府に召し出されたのは、同年十二月十二日のことである⁽⁴⁷⁾。

年が明けて文久三年正月四日、三島貞一郎と中村季平ら備中松山藩の書生が、本町の旅宿で嶮南に面会を求めたので嶮南は佐土原織部や長倉喜太郎らと談義所寮で二人と面会した⁽⁴⁸⁾。二人は主君板倉勝静（老中）の命で九州諸藩の時情探索のために来藩したのであった。残念ながらこの時の具体的なやり取りは記録されていない。

ない。

三月五日夜、外浦に異国船襲来との報を受けて大騒ぎとなった⁽⁴⁹⁾が、島津久光の上京途中の滞船であったことは先述した通りである。

大坂留守居横井斧助から、三月四日出の急便が来着したのは同月十六日のことである。抱膝庵にいた嶮南は急遽会所に駆け付け、一門以下重役たちと協議した。急便の内容は次の通りである⁽⁵⁰⁾。

今春二月ノ末英吉利西ノ軍艦十九艘内外横濱ニ渡来シテ、去年島津三郎江戸出立ノ節、三郎家来生妻ニ於テ英人三人或ハ二人ニ作ヲ殺セシニ付、三个條ノ難題其一三郎ヲ御渡シアルカ、其二薩摩征討ヲ御赦免アルカ、其三薩摩人ニ殺サレシ英人ノ妻子養育料トシテ金三十萬兩御償ヒアルカ、此三个條ノ返詞三月八日マテ相待、若シ一个條モ御許容ナキニ於テハ兵端ヲ開クヘシトノ事ナリ申シ立候処、何レモ聞届ケラレ難キ事件ニテ、御一戦ノ外之無キニ付、天下ノ諸侯各藩屏ノ任ヲ失ハス粉骨ヲ盡スヘキノ旨、京都ニ於テ御布告アリ（後略）

二月末（十九日、以下同じ）、イギリス軍艦一九艘内外（八艘）が横浜に渡来した。その理由は、昨年島津三郎が江戸を出立して京都に向かう途中、生麦村で英人三人（二人）を殺害したので、幕府に三カ条の「難題」を提示するものであった。「難題」とは、一島津久光を英国側に引き渡す、二薩摩征討を許可する、三薩摩士に殺害された英国人の妻子に養育料として金三〇万両を賠償する、というものである。返答は三月八日まで待ち、もし一条も許容ない場合は「兵端ヲ開ク」という。幕府はいずれも聞き届けが

たいと判断しており、「御一戦ノ外之無キ」と英国との戦争は避けられないという切羽詰まった内容であった。

上落していた諸大名たちは続々と帰国の途につき、井伊家は横浜から川崎までの警衛を命じられた。二月十三日に江戸を発った将軍家茂は、三月四日に二条城に入った。こうした将軍・大名たちの動向を鑑みて、嶠南は主君飫肥藩主伊東祐相について、「我公ハ十年来ノ宿疾猶未タ平癒セス、絶テ朝覲モナシ玉ハス、神田門警衛モ今以テ免セラレス、將軍東帰ノ上ナラデハ帰国ノ暇モ仰セ出サレサル趣ナレハ」と、祐相が持病を理由に一〇数年も帰藩せず、久しく朝覲もないことを嘆いている。さらに、「嗚呼天下ノ形勢已ニ数年前ヨリ鏡ニ懸タル如クナルニ、我カ公斯クマテ緩々ト江戸ニ居玉ヒテ、終ニ此節ノ心配ト相成候ハ、全ク江戸詰家老ノ不覚ナリトテ、国人ノ墳敷一方ナラス」と、藩内において藩士たちの憤懣が高まっていた。実際に祐相は、天保十二年に外様大名としては異例の奏者番に任じられていたが、嘉永四年頃から「宿疾」であり、帰藩するのは文久三年八月のことである。⁽⁵³⁾

(三) 延岡藩宮崎役所による情報収集

文久二年三月、宮崎役所から藩に提出された「近領風聞書」では、一同(薩)州昨年方別而鉄炮大張込ニ而、是迄加様之儀者無之事之由、既ニ当春杯ハ都之城郷士五百人程高岡表江参候 処、高岡表方も同四百人内外出会、当打之勝負杯三四日も有之、其後高岡方も都之城江参り、右同様之事之由ニ御座候⁽⁵⁴⁾

など、都城と高岡郷士たちが共同軍事訓練をしていたことが報告されている。

五月七日、延岡藩宮崎役所は薩摩藩領高岡の馬喰からの風聞として、

都ノ城様急ニ御登り申事ニ而、中々馬買所無之、鹿兒嶋方も大勢登りニ相成候由、都ノ城より者上下式百人、鹿兒嶋方之人数不相訳候得共、両所共朔日二日迄ニ者蒸気船江乗船登りニ相成候由⁽⁵⁵⁾

との情報を得ている。実際に都城領主島津久静が久光の要請により、約三〇〇人の都城部隊を率いて鹿兒島を発ったのは同月四日のことである。⁽⁵⁶⁾

文久二年七月、延岡藩は幕府より英国人宿寺に指定された高輪東禅寺と同所統上洞庵へ警固人を差出すよう命じられた。⁽⁵⁷⁾ 藩は警固費用捻出のため、領内村々に村高一〇〇石につき金四両宛の高役金、町方には間口一間につき銀二匁五分宛の軒別銀上納を命じた。⁽⁵⁸⁾ これに対して九月には、宮崎郡大塚村庄屋栄松が金五五両、同郡上別府村庄屋兼帯松浦一蔵が金一五両を、それぞれ寸志献納している。⁽⁵⁹⁾

同年八月十日、日田郡代屋代増之助から延岡藩家老中に対して、郡代支配下の日向国海岸に異国船渡来時には警固人を差出すよう申し入れがあった。これは文政八年令の履行を求めたものであり、藩は二十日付で承知した旨返書している。⁽⁶⁰⁾

異国船渡来の緊張感が高まりつつあるなかで、延岡藩が薩摩表へ英国艦隊が来襲する可能性が非常に高いことを知ったのは、江

戸からの大目付廻状を知らせる同月八日仕廻の便が延岡に届いた。翌文久三年三月二十二日のことである。

一（前略）此度神奈川表江英国軍艦數艘渡来、重大之事件書翰を以申立、来ル八日までニ御決答無之候ハ、船将之職掌申立候、右者不容易儀故応接之模様ニ寄可開兵端も難計候間、差函次第出張之心得を以人数等手当可致旨、委細御触有之候旨

一右ニ付御沙汰次第御人数被差出、時宜寄御出馬茂被遊候付、出役之面々夫々被仰付候旨⁽⁶¹⁾

これは三月五日付の老中井上河内守「覚」であるが、続いて「英国軍艦ヨリ差出候書翰大意」として生麦事件の経緯と、それに対する要求が具体的に認められていた。

延岡藩では、異国船渡来時に幕領細島湊への藩兵・人足出張や兵糧輸送の備えを行うとともに、近隣諸藩へ使者を派遣して異国船渡来時の協力を依頼している。四月十七日に高鍋藩と熊本藩、同月二十四日に豊後岡藩、二十七日豊後佐伯藩などである。藩は、四月十九日付で高鍋藩頭取坂田秀からは次のような返書を受けとった。⁽⁶³⁾

今般英国軍艦渡来不容易義申立、応接之模様ニ寄開兵端候茂難計旨、御沙汰御座候付而者、当時御在所留守中ニ付別而御心配之儀被成御座候付、家来衆江諸事無服職申合御座候様被致候旨、以御使者被仰遣候段致承知被入御念儀存候、是二而も兼而右様致度存居候処、預御使者不背之家来共ニ御座候得共、被仰遣候趣申付置候間、其御家来得よりも万端右御含ニ

而申談御座候様致度、此段及御答候

四月十九日

秋月長門守頭取

坂田 秀

高鍋藩とはともに細島湊を警固する受持相手であり、文久三年には二藩協同で細島湊の両岸に砲台場建築に着工するなど協力関係にあった。⁽⁶⁴⁾

こうした延岡藩の「心配」は、「当時御在府御留主中」というように藩主不在によるところが大きく、藩主内藤政義の隠居問題も影響していた。すなわち政義は文久二年十月二十一日付で幕府老中へ隠居願を出しており、養嗣子寛次郎（政挙）はまだ幼少であった。⁽⁶⁵⁾

このように、この時期延岡藩は近隣諸藩との連携が何より必要であることを自覚していたのである。

二 薩英戦争をめぐる情報収集活動

(一) 飢肥藩による情報収集活動

飢肥藩が英国艦隊の鹿児島襲来を知ったのは、実際に戦闘が開始された七月二日のことである。それは鹿児島から帰着した府下の足軽河野新兵衛からの報告である。⁽⁶⁶⁾

六月二十五日に鹿児島城下に着いた新兵衛は、二十七日晩景、桜島から合図の大砲一〇発が響き渡るのを聞いた。台場詰人たちは台場に駆けつけ、その夜は市中が大騒ぎとなった。翌二十八日、前夜応接に出た者もまだ帰らず、艦隊入港の趣意も不明で、

市中では薪水を求めての来航かとの楽観的な評判であった。ただし、市中は各家とも戸を閉め外出は許されなかった。旅宿の主人の話では、藩主家の姫君たちは国分に避難し、市中の男女五八歳以上と一五歳以下の者も残らず避難するよう達があったという。二十九日にならねば確かなことは分からないが、ここ二・三日のうちには合戦は始まらないだろうとのことだった。

新兵衛は二十八日昼前には鹿児島を発ち、鹿児島城下から熊本へ通じる薩摩街道大口筋の難所白銀坂にさしかかった時、桜島のはずれから艦隊七艘が侵入していくのが見えた。そのうち一艘は一〇〇間内外(約一八二呎ほど)もあろうかと思われ見受けられた。新兵衛は半道のところではばらく艦隊を眺めていたが、先を急ぐのでその場を立ち去ったため、その後の様子は分からないという。重富に来たときに、薩摩の蒸気船三艘が海辺に隠されているのを見て、地元の人にその理由を問うと、夷船に奪われなためだということだった。

加治木を過ぎ国分に来る途中で、鹿児島に行くという者たちに出会ったが、みな「ボッサキ半纏」を着して銃銃を携え、中には馬に乗る者もいた。彼等は道話で、夷船に向かって鉄炮を打ちかけても逃げられるが、夷人たちが上陸すればどこまでも追詰め討ち取ると口々に言う。その晩は国分に一泊したが、夜半に半鐘・太鼓の音が聞こえ、一番手・二番手が追々桜島に向いたという。

二十九日、新兵衛は国分を発ち通山に来たところ、都城から鹿児島へ向かう二〇〇人程の兵と行き会った。場合によってはさら

に二〇〇人も向かうことになるということだった。新兵衛が出会った都城の一行は、安山隆左衛門以下一番組一手であった。⁽⁶⁷⁾ 都城からは合計六〇四人が出兵し、祇園洲台場堅の税所清太が即死、沖小島へ駆付守衛の落合四郎右衛門ら六人が負傷している。⁽⁶⁸⁾

その日の七ツ時分(午後四時頃)、都城に着いたところ鹿児島からの飛脚が追いついたので様子を聞けば、艦隊は最初七艘だったが追々二五艘になり、湾外には一〇〇余艘も控えているという評判であるという。もっとも、後にこれは訛言(IIでたため)であったことがわかる。その晩は寺柱に一宿し、翌日すなわち七月一日に藩境である牛の峠を過ぎるまでは砲音も聞こえなかったので、多分合戦はまだ始まらないと思ったと報告している。実際に戦闘が始まるのは二日からなので、新兵衛の聞いた情報は艦隊数が「訛言」であったかは、まづまづ正確であったといえる。

新兵衛の報告をうけた飢肥藩執行部は、暴風雨にもかかわらず家老河崎縫殿助・用人田原文内・同荒武蔵人・用人伊東直記・相談中落合主馬助らが、一門伊東求馬宅で集議した。続いて翌日も五ツ時に登城して、小書院で海防の担当について議論を続け、情報探索のために寺柱と串間に探索人を出している。⁽⁶⁹⁾

英国艦隊が来襲した後どうなったかについて、六日には飢肥藩家老から薩摩藩家老宛に次のような書状を送っている。⁽⁷⁰⁾

一筆致啓上候、各様愈御堅達可ク被成御勤仕珍重奉存候、然レ者此度其御城下港口ニ夷船數艘渡来之由、先日差出候飛脚之者ヨリ申出候、左京大夫留守中ナカラ右様之節ハ使者差シ上ケ、御伺可キ申上旨兼而申付置キ候へ、卑賤之者之申口

不ル慥事ニモ有之、且御繁用中却テ御手数ト存シ、一ト先ツ各様迄拙者共ヨリ御見廻申上度如ク此御坐候、恐惶謹言

七月六日

佐土原織部

島津大蔵様

河崎縫殿助

小松帯刀様

川上式部様

これによると、鹿兒島への夷船襲来の報は飛脚からもたらされたもので、卑賤の者の報告でもあるので不確かではあるがというように、飫肥藩ではこの時点ではまだ薩摩藩と英国艦隊の交戦は把握していない。しかし英国艦隊が鹿兒島に襲来したことは事実であるため、六日から油津正行寺の上山嶺に砲台を築かせている。⁽¹¹⁾ また、万一外浦に艦隊が入港するやもしれないと、大田原和門に組足軽二五人を付けて外浦に出張らせ、七日交代の輪番で一組宛勤番させている。⁽¹²⁾

さて飫肥藩では、七月二日・三日の鹿兒島での薩英戦争について、「巷説紛々トシテ一定セス」として諸方から提出された情報を提供者ごとに集めて記載している（第1表参照）。

ここではおおよそ、串間（高鍋藩領福島）の「土民」が志布志人から聞いたもの、斉藤袈裟蔵が寺柱で聞いたもの、飛脚が鹿兒島で自ら聞いたたり、飛脚問屋⁽¹³⁾で聞いたもの、その他に分けられる。かなり正確な情報もあるが、なかには英国軍艦に婦人八人が乗船しており、さらに生麦で夫を殺害された婦人がいたというものもあり、さすがに「訛言」といふべきものであった。

特筆すべきものは、飛脚のもたらず情報である（④⑤⑥⑦⑧⑫）

⑮。彼等が実際に自分で目や耳にした情報に加えて、飛脚問屋内で話題になっていたり地元の人から聞いた情報など、内容はかなり多岐に亘っている。合戦の具体的な場面（⑤⑥⑦⑫）などは飛脚個人で収集できたとは考えにくい。恐らく、実際に戦闘に加わっていた兵士たち「手寄」から聞き取ったと思われる。また地理的には、都城来住口から飫肥藩領酒谷村へ通じる往還が通り関所も置かれた寺柱や、飫肥藩領清武郷に近い関外四カ郷の一つであり東目防御の要であった高岡郷に情報が集中したのである。

合戦状況のほかに興味深いものは、彦根藩士が鹿兒島に來襲するという風説があったことである。⁽¹⁵⁾ 陣尾の斉藤袈裟蔵が寺柱で聞き取った話として次のように言う。

此節ノ虚ニ乗シテ彦根ヨリ攻来ルノモ測リ難シ、用心セヨトノ号令ナリト、當家ノ事ヲナゾラヘテ云ヒシニヤト可笑思ヒシカ

また高鍋の鈴木百助からは、

薩州ニテハ彦根ノ士三百人バカリ近国ニ入込タリトテ用心嚴キ由告来レリ

という内容が伝えられる。

さらに、先述した川越六左衛門が高岡で郷士年寄志賀清右衛門から聞いた話として次のように言う。

此度甕島ニ来リシ夷船ノ中ニ、日本人ノカツカウニテ一斎ニ白キ蒙リモノセシ男数十人、船上ニ露ハレ出タリ、甕島ニテハ彦根ノ浪士ナリト云

彦根藩士が三〇〇人程も近国に入り込んでいるなどという風説

第1表 豚肥藩による情報収集

情報提供者	情報内容
① 申間土民が志布志人より聞いた趣旨、高鍋藩船木百助よりの報告	<ul style="list-style-type: none"> 6月28日、英国軍艦7艘が鹿児島城下陸より50間程のところへ乗り入れ、翌29日橋船を下ろして台場を見物した。人がいたが、生麦で薩摩士に殺された者の婦人もいた。 その日薩人30人ばかりが鶏・西瓜を持参して夷船に乗り入らんとしたが、夷人たちは紐のついた網を張っていたため乗り入ることができなかった。
② 陣尾の斉藤袈裟藏が寺住で聞いた話	<ul style="list-style-type: none"> その夜は夷船中で笙七律の音楽が流れた。翌朝も同じ所に船がけし音楽がしきりに聞こえた。
③ 申間土民志布志人より聞いた話	<ul style="list-style-type: none"> 28日夷人より長さ1尋ばかりの書翰で難題を薩州へ申し入れ、24時間以内に返答を求めた。
④ 清武の上ノ町に来ていた薩藩領高城の住人後藤仁右衛門が5日夜高城より飛脚にて報知の趣	<ul style="list-style-type: none"> 薩州からの返答に満足しなかつたのか、その夜夷人たちは風雨に乗じて重富に繫泊させていた蒸気船3艘を、はみな梅に飛び込んで逃げたが、船将2人を連れていくところでは五代才助と松木甲安)はそのまま手出しするまでには決したため2日昼前からは砲発を始めた。みなそれを船守つても、夷人が、前夜に奪った蒸気船3艘を焼却したため、それから互いに打ち合いになった。出す砲弾の多さは夷船にあたらざ、たまたまたたつても打抜くことはできなかった。種々取り混ぜて打ち出した。2日の晩夷船は鹿児島より3里ほど西の谷山まで退いていたが、3日七ツ時分また襲来して檣島の方から打ちかけてきたが、薩人は昨日の技量ではどれほど打つても夷船を打ち抜くことは出来ないのでないかという)備えた青山善吉が山上から下に向かって打ちかけたところ、夷船7艘で洋小島を取り囲んで激しく打ちかけたが、弾丸はみな山の中腹に止まって死傷者は1人もいなかった。弾丸は夷船の頭上より打ち込んだため、夷人たちは叫び声を上げて船を2・3度巡して程なく引き上げ、その後再来はなかった。
⑤ 豚肥の飛脚が鹿児島問屋で聞き取った話	<ul style="list-style-type: none"> (合戦の様子)夷船からは一時には砲撃せず「トントノ調子」で次第次第に打ち出した。これは自分たちの船を傷めないためだろうか、それゆえに砲発のたび毎に台場の方にもよくわかるので、砲撃の煙を見ると一斉に数千の兵が地上に伏したり、壘の陰に隠れて弾丸を避ける姿は見苦しいことであった。

(註) 「六郷荘日誌」 文久三年七月十日条より作成。

情報提供者	情報内容
⑦ 豚肥の飛脚が鹿児島問屋で聞き取った話	<ul style="list-style-type: none"> ・夷船は、鹿児島城下上町のはずれの山頂に鎮座する祇園社を目がけ砲撃し、周辺の寺々は悉く破壊された。藩主の館は松樹に隠れて海上からはつきりとは見えなかったため、敵もそこまでは目がけなかったと見え、焼失した家屋はなかった。
⑧ 豚肥の飛脚が目撃した話	<ul style="list-style-type: none"> ・鹿児島島の浜辺にあった太さ1丈ほどの松の木は中央から折れていた。夷砲の威力のすさまじさを思い知らされた。
⑨ 陣尾の斉藤袈裟藏開合として寺柱に参りし所、寺柱の者語り言	<ul style="list-style-type: none"> ・この度の混乱に生じて彦根藩士が攻めてくることも計り難く用心せよとの号令があったという。「当家」のごとく見做して言うのであるうかとおかしかった。
⑩ 高鍋の鈴木百助から聞いた話	<ul style="list-style-type: none"> ・薩摩では彦根藩士300人ほどが近国に入込んでいて用心が厳しいことを知らせてきた。
⑪ 清武の川越六左衛門の開合	<ul style="list-style-type: none"> ・高岡に行つて志賀清右衛門に面会した際に、この度鹿児島に来襲した夷船のなかに、日本人の格好をして一者に白衣をまとった男数10人が船上に姿を見せたが、鹿児島では彦根藩の浪士だという。 ・清右衛門からはこれについて何か聞いていないかを問われ、六左衛門は何も承知していない旨答えた。
⑫ 豚肥の飛脚が鹿児島にて聞いた話	<ul style="list-style-type: none"> ・薩摩藩家老川上龍衛は谷山の地頭で当地にいたが、夷船の来襲を聞いて鹿児島に駆け付け、合戦の最中で敵の様子を見ようと砲台の上に出たところ、夷船から打ち出した破裂丸が飛んできた。龍衛の額に命中。後ろに従つて下男は弾丸のために額半分が吹き飛ばされて即死した。
⑬ 栗山弥七から聞いた話	<ul style="list-style-type: none"> ・川上龍衛も受けた傷がもとで死んだ。
⑭ 斉藤袈裟藏が寺柱で聞いた話	<ul style="list-style-type: none"> ・薩摩の台場語の藩士5人（あるいは8人）が討ち死にしたらしい。その中の1人は微塵となり陣笠だけが残つたという。られ、苦痛のあまり傍らの者に首を刎ねてくれと頼んだが誰も承知しなかったため、自ら切腹して死んだ。が、薩摩が藩外の者に対して言うところでは10人内外だった。ほかにも内地で被弾して死んだものも多かったという。
⑮ 豚肥の飛脚が鹿児島で薩人から聞いた話	<ul style="list-style-type: none"> ・英人の死骸2体が鹿児島城下に晒された。夷船が退却した後、1体は鹿児島島の浜辺に打ち上げられ、もう1体は桜島で砲丸をおもいとして沈めたが、漁師の網に掛かっつて引き上げられた。いずれも腹を割いてその痕をもとのように縫っていたが、どんな訳かはわからないが、かすると「人臈」でも取ったのではないかと薩人はいつている。
⑯ 高岡清水八郎左衛門船の水主等（城ヶ崎瀬頭辺りの者）から川越六左衛門が直接聞いた話	<ul style="list-style-type: none"> ・天文21（1552）年に伊東義祐が建造したという佐土原の金柏寺の巨鐘を、鹿児島で大砲建造の地鋪に利用するため高岡の清水八郎左衛門所有で450石積長船に積み入れ、石垣の間で沈められた。船は沈没し、7月2日双方が打ち合ったため船は沈没し巨鐘も海底に沈んだが後引き上げられた。

はもちろん「訛言」に他ならないが、この類の風説は根強くあったようである。前年三月には江戸で「井伊様御家来薩州屋鋪江切込候噂仕候者も有之候由」との噂を書き留めている。⁽⁷⁶⁾ 桜田門外の変で井伊大老襲撃計画の中心にいたのは薩摩藩誠忠組であり、薩摩藩から井伊大老衝撃に参加したのは誠忠組同志の有村次左衛門一人であったが、この時期まで彦根藩の報復がまことしやかに取り沙汰されているのは、大老襲撃を実行した薩摩藩士を世間がどのように見ていたかが窺われ興味深い。

薩英戦争後の七月二十七日、飢肥藩は見舞いの使者として伊東直記(相談中並)を薩摩に派遣した。⁽⁷⁸⁾ 八月六日に帰藩した直記からの報告では、薩摩では諸藩の使者を鹿兒島には入れず加治木で応対しているという。

嶠南は、加治木家中士である邦永伸之進と江戸安井門下の旧知であった関係で、直記に書簡を託してその返書を得ているが、返書内容は「英夷来寇ノ事情」を詳細に伝える内容であった。⁽⁷⁹⁾ 第2表は、薩英戦争について邦永が薩摩藩士として嶠南に報じた内容と、飛脚その他から飢肥藩が得た情報を比較したものである。

これによると、六月二十七日の艦隊来襲から七月四日の退帆までの記事内容は相違点は少なく、飛脚その他の情報も正確度が高かったと言える。もっとも戦闘状況や死傷者についての記述は若干異なっている。飛脚その他は、戦闘開始の状況について次のように言う。⁽⁸⁰⁾

薩州ニテハ夷船ヨリ手出シスルマテ決シテ発砲スマシキ旨敵命アリシユエ、皆其旨ヲ承テ少モ違背セザリシ処、夷人ヨリ

手出シケルユヘ薩人モ怒リニ堪ヘス、二日ノ昼前ヨリ打始メケルニ、夷船ヨリモ頻ニ発砲シ、且前夜奪ヒ去リシ三艘ノ蒸気船ヲ立トコロニ焼尽セリ

夷船が発砲するまで攻撃してはならないと厳命されていたが、夷人のほうから発砲したのでそれに応じて二日昼前から打方を開始したという。また英国に奪取された薩摩の蒸気船は前夜(七月一日)だとする。これに対して邦永伸之進の説明は若干異なる。

此方蒸気船三艘ハ其以前城下ヨリ三里餘重富浦ヘ遣シ置キ、乗組人数モ寡少ニ御坐候処、二日早天夷艦三艘来リ、蒸気船ヲ不残奪ヒ取、桜島前類船繫泊之所ヘ引行キ申シ候、依テ之ニ台場ヨリ発砲致シ候処、彼ヨリモ夥ク打放致シ、大抵四ツ半時分ヨリ日暮マテ無ク間断双方打合ヒ申シ候。⁽⁸¹⁾

すなわち重富に避難させておいた蒸気船三艘が奪取されたのは二日早朝のこととし、桜島の本船繫泊所まで連行したので台場から発砲したとする。

また戦闘状況について、飢肥の飛脚が鹿兒島問屋で聞いた話として次のように言う。⁽⁸²⁾

薩人ヨリ打出ス砲弾ハ多ク夷船ニ中ラス、偶ニ中ルト雖モ打貫クヲ能ハス、夷船ヨリ打出ス砲弾ハ多クワザモノニテ、或ハ鉛丸或ハ鐵丸或ハ長クシテ尖キ丸ナト種々取難セ打出セリ夷船から打ち出す砲弾の威力のすさまじさを報じる一方で、薩摩の対応を「昨日ノ手ナミニテハ何程打ツテモ夷船ヲ打貫クヲ能ハサルヲ承知セシニヤ、空砲ナト打ツテアシラヘリ」としている。

これに対して仲之進は戦闘状況を詳細に報じる。⁽⁸³⁾

當日大風雨ニテ敵ハ風上、此方ハ風下ニテ別々難義仕リ候、然レ即死ハ台場持之内一人有之、其外五六人モ有之候ヘ、是ハ内地存シ寄不ル所へ彈丸飛ヒ来リ、不運ニ中リ震死モ同前ニ候ヘハ、戦死トハ難ク申シ候

即死は台場持の一人のみで、そのほか五・六人もいたがそれは思いがけないところに着弾して被弾したのであるから「震死」であり、戦死ではないと強弁する。さらに、こうした戦死者が少ないわけを次のようにいう。⁽⁸⁴⁾

右死亡少キ訳ハ、一ツニハ大風雨ニテ狙ヒ不ル定ラ故ニ可有之候、一ツニハ台場ヨリ敵船ヲ見居候ヘハ、放発之節火光閃キ煙出候ニ付能相知レ申シ候、其節只今放発ト高聲ニ呼ハリ候ヘハ、総人数土手之内ヘ頭ヲ付丸ヲ避ケ申シ候、夫レ故一組之内一人ツ、ハ見番ヲ立テ置申候

放発するのが閃光と煙によりわかるので、声を上げて知らせ避難すればよく、「是等ハ実地ニ臨ミ自然ト出タル知恵」と自讃するのである。仲之進は嶮南とは安井門下で旧知の仲ではあっても、戦死者数など自藩の被害状況を詳細に知らせることは憚られたようである。

これに対して飛脚たちからの死傷者の情報は、実否はさておき詳細で生々しい。飢肥の飛脚が鹿児島で聞いた話として、次のように語る。⁽⁸⁵⁾

薩州ノ家老川上龍衛ハ、谷山ノ地頭トシテ同所ニ参リ居タルカ、夷船ノ来ルト聞テ甕島ニ駆付シ処、合戦最中ナレハ敵ノ様子ヲ見ントテ砲台ノ上ニ出ルト、齊ク夷船ヨリ打出ス

破裂丸飛来テ龍衛ノ額ニ中リ、後ニ從ヒシ僕ハ彈丸ノタメニ面半分目ヨリ以上ヲ打截ラレテ即死セリ

家老川上龍衛（久齢）が砲台の上に出たところ、夷船から砲発された破裂丸が額に当たり、後ろにいた従僕は顔面の目より上を打ち載られて即死したという。龍衛も額の疵がもとで死んだとするが、龍衛が家老になったのは翌元治元年であり生存が確認でき⁽⁸⁶⁾る。

また、齊藤袈裟蔵が寺柱で聞いた話として次のように報じている。

薩州台場詰ノ十五人ハカリ或ハ八人トモ云打死セリ、其中一人ハ微塵ニ成ツテ陣笠ハカリ残レリ、又一人ハ片足ヲ打折ラレ、苦痛ノ餘リ傍ナル人ニ向ヒ、首ヲ刎呉レト云ヒシカレ誰ゾ肯フ人モ無リケレハ、自ラ屠腹シテ果テタリケル

被弾して肉片となり陣笠だけが残ったり、足を負傷して苦痛のあまり屠腹して死んだなど、戦闘の場面が実に鮮明に語られているが、実否は判断し難い。邦永が「震死」として戦死者数に入れないのに対して、ここでは一〇人内外とみており、「右ノ内地ニテソレ丸ニ中ツテ死シタル者モ多カルヘシ」としている。

薩英戦争によるイギリス側の犠牲者は、旗艦艦長と副長が即死し、ほかに死者一三人、負傷者は五〇人⁽⁸⁷⁾にのぼった。飢肥の飛脚が鹿児島で聞いた話では、イギリス人の死骸二体が城下に晒されている。一体は城下の浜に打ち上げられ、もう一体は桜島で漁師の網に掛かって上がったという。いずれも腹を割かれたあとまた元のように縫われていたのを見て、「如何ナル譯モ分ラネ、若

クハ人膽ニテモ取シニヤト薩人ハ申シケルトナリ」と記している。「人膽」を取という当時の人々の夷人に対する好奇心・恐怖心が窺われて興味深い。

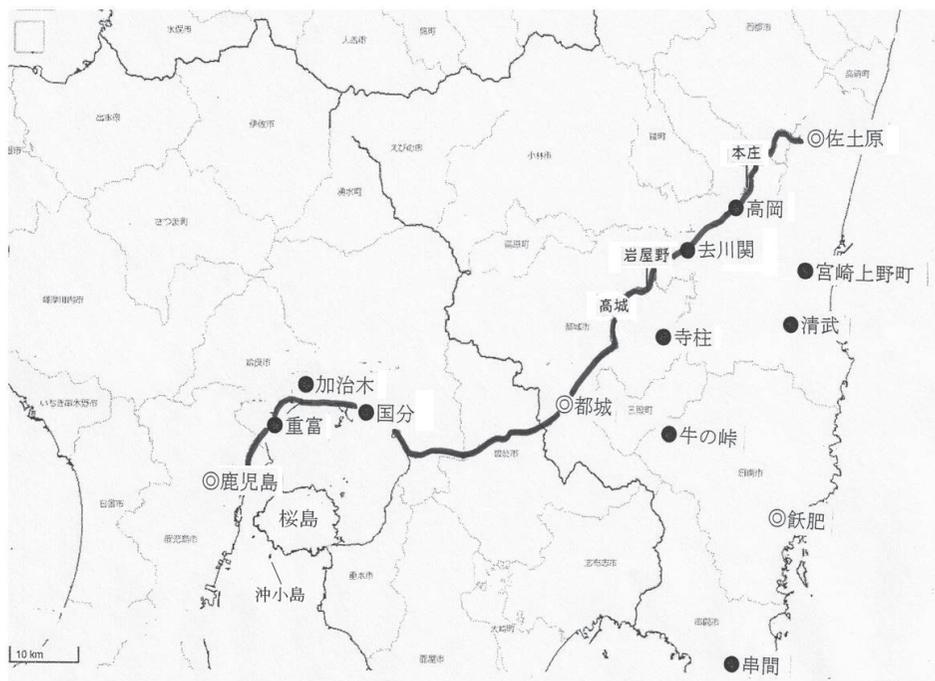
(二) 延岡藩宮崎役所の情報収集活動

江戸では英国人宿寺である高輪東禅寺、延岡では幕領細島湊の警固という軍役に賦課された延岡藩は、英国軍艦の来襲はかなり切迫した現実問題として意識されていた。

文久三年、宮崎郡村々では「四五年前より沙汰有之」として、異国船が江戸・長崎に加えて「薩州鹿兒嶋江茂参候趣」との風聞があった。その備えとして、薩摩藩は東目筋の高岡・綾・穆佐・倉岡の外城衆には鉄炮・米二升・使錢五〇〇文・草鞋三束宛を配布し、鹿兒島に異国船が渡来した時はすぐに鹿兒島へ馳せ参じるよう命じていた。⁸⁸⁾

鹿兒島表へ英国軍艦が六月二十八日に渡来し、七月二日に「炮戦」になったとの情報は、直ちに宮崎役所から延岡郡方へ報告された。ここでは郡方控である「薩州表江異国船渡来ニ付所々聞合手続書」⁸⁹⁾から、薩摩藩への探索状況についてみていこう。

七月四日、鹿兒島表へ英国軍艦が来襲したので支藩佐土原に派兵を命じる飛脚が、宮崎郡上別府村の枝町上野町渡場に姿を見せた。折しも台風による出水ため渡川できず、上野町に置かれていた薩州炭勘場から無理に渡川したという。勘場には鹿兒島城下から来た役人が詰めているので問い合わせたところ、何も変わったことはない、近頃異国船七艘が来航したらしいが、何事でも来たか



はわからないとのことであった。来航の目的が分かり次第知らせてくれるよう頼んでいたところ、同日夕刻に佐土原藩が鹿児島へ派兵するのは間違いないことが勘場で分かった。宮崎役所では、郷組壱岐源吾を佐土原へ問い合わせに行かせたが、疑問の余地は無かった。

薩英戦争は七月二日に始まり四日には軍艦は出帆しているが、その前後の情報探索はどうであったのだろうか。同郡医師の弓削玄門が聞き出し同六日に書簡にて宮崎代官所へ次のように報じている。

①高岡町白石徳助の話

高岡町の白石徳助が、先月二十八日に鹿児島へ行き昨日朝に帰郷した。徳助の話では、当月朔日に英国艦隊七艘が台場内に入り込み、一尋ばかりの書簡を提出し、二四時間以内に返答するよう迫ったらしい。しかし二日に鹿児島から大勢が異国船に乗り込み生け捕りにする積もりで押しかけたが、乗り込むことはできなかったので大砲三〇〇挺ほどを打ちかけた。これは「麻之刀を以牛ノ背中を打如くにて用立不申」、三日には城下桜島前の台場より大砲六四〇〜五〇挺を打ったがこれも役に立たなかった。異船から打たれた鉄砲（大砲）丸は四角で先が尖り、鉛玉・錫玉・鉄玉三つが込められたもので、薩州の蒸気船二艘ともに打ち砕かれ大勢が死んだらしい。桜島台場も数一〇人が死んだという。それゆえ大砲の戦いではとても勝目が無いとして、四日には戦闘を止めていずれ方策を講じて討ち取るべしと評議したらしい。城下町も大砲で破壊され、上町は焼き払われたという。

②倉岡郷士日高十郎の話

薩州倉岡郷士の日高十郎は、延御領跡江組大庄屋兼帯松浦市郎・瓜生野組大庄屋兼帯清水平治と昵懇で、十郎が鹿児島から帰ったと聞いて両人が話を聞きに来た。十郎の話は次の通りである。

去月二十八日、英国艦隊七艘が鹿児島港へ乗り込み、分銅のようなものを下ろして湾内の深淺を探る様子で、下町「かんき」⁽⁹⁰⁾まで近づき、島津三郎の首を渡すか、琉球を渡すか、米を渡すかの三カ条のうち一条を聞き届けるよう要求した。薩摩側は彼等を上陸させるつもりで策を弄したが、彼等は取り合わなかった。藩士二〇〇人ばかりが申し合わせて夷船に乗り込み切り死にするつもりで、鶏や西瓜をたくさん船に積込んで異船に乗り付けた。しかし夷船ではこれを受けとらず、鋭突鉄砲を向けたので仕方なく引き帰した。夜分は銅鑼等をたたき三味線のような音も聞こえた。

薩州の蒸気船二艘を夷船が曳航したので、取り敢えず大砲を打ちかけたが何の役にもたなかった。夷船は下町かんき台場元へ乗り付け、同二日より城に向けて大砲を打ちかけたが、弾は城の後山に着弾して、廻り一丈余の松木を打ち折った。それより東方へ廻り、翌三日まで打ち合いが続いた。夷船が打った砲弾は上町を焼き払い、都城屋敷および南林寺を破損し、鶴丸城にも被害があったという。

異船から打った砲弾は威力が強く凌ぎかねていたところ、桜島台場の高所から下向に打った砲弾が夷船一艘に当たり損傷を与えたようで、夷船の砲撃は三日までで止んだ。夷船は、桜島脇に碇泊していた米・砂糖を積載した船二艘の荷物を奪った上焼き捨て

出帆していったが、破損した一艘は谷山沖へ滞船し、空船か人が乗船しているかは分からなかった。

こうしたなかで、高岡や佐土原から追々駆け付けた者たちうち、去川外の者たちは引き取って、東目口を固めるよう指示があった。佐土原藩主島津忠寛と上下四〇〇五〇人は鹿児島に向かい、残りの家来たちは都城から高岡まで引き返したが、再度一艘が来襲したという一報があり、佐土原衆が呼び返しになった。真相を確かめるために、大庄屋兼帯松浦市郎の孫繁太を高岡役場へ聞き合に出したが、はっきりしたことは分からなかった。瓜生野組郡方支配郷士で宮崎役所手附の後藤又一が、役方知人もいるということで高岡へ派遣されている。

③ 鹿児島城下町喜平治より高岡表親類方への書状

喜平治が五日に認めた書状が、高岡の親類方へ届いたのは九日夜のことである。喜平治は薩州蒸気船天祐丸に乗船し、大坂から帰郷途中に細島湊へ入津した。六月二十四日、細島を出帆して翌二十五日に鹿児島表へ無事帰帆した。翌日前浜へ廻船し、二十七日に荷揚げ等に従事していたところ、俄に狼煙が上がるのが見え家中は大騒ぎになった。山川沖に夷国船数艘が来襲したと聞いて、天祐丸のほか白鳳丸・青鷹丸三艘を前濱に碇泊させては拿捕される恐れがあるとして重富浦へ廻船させた。同七日暮方、夷国船七艘が前濱へ乗り込み、橋船で前濱および所々の測量を始めた。重富に碇泊させていた天祐丸ほか三艘を見つけて測量を始めたので、乗組員が声をかけて制したが返答はなく、そのまま本船へ戻っていったという。

夷国船は七月一日も測量を続け、翌二日早朝に夷国船五艘が廻来し、重富に碇泊させていた蒸気船三艘に綱を架けて曳航していった。乗組員たちは刀・脇差を渡して下船するよう命じられた。藩からは異人方から手出ししないうちに当方から粗忽なことはしないよう厳命されていたので、乗合役頭が制して手出しさせなかった。この時の日本側乗組員の動作については次のように記す。

中二者残念之余りニ候哉、船を渡ス間敷与ヒシメキ候者有之候処、其内壱人を劔ニ而背中ニ差通其俣即死、又壱人江疵ヲ付候由ニ而、無致方上陸致候者茂有之

殺傷事件があったかは確認できないが、手出しできずに下船を強要されるなど、不法な対応であったことは明白である。天祐丸の乗組員のうち半方は重富で下船し、残りの半方は乗船したまま島まで曳航されそこで下船した。天祐丸には頭役の五代才助と松木小庵二人のみが残ったという。

薩摩蒸気船三艘が拿捕されたことが鹿児島城下に伝わり、それから双方打ち合いになった。夜半まで大砲の音が止まなかったという。翌三日昼頃より再度打ち合いが始まり、夕刻に夷船は谷山沖へ引き揚げ打ち合いは止んだ。夷船は破損箇所を修繕しているようで、翌四日に夷船は出帆したが、そのうち一艘は大破しているように見え、山川沖まで曳航して同所に残し置いたらしいということであった。

この戦闘で薩摩方の死人は一〇人程だとあるが、高岡での話ではこれは喜平治が見聞した数であり、このほかにも死人があるのではないかということだった。

④高岡の郷士志賀清右衛門から直に聞いた話

七月一日、鹿兒島表へ夷国船が来襲したと聞いて、高木正右衛門と志賀清右衛門らは即刻出立し、都城まで馬それから徒歩で八ツ時半頃重富に着いた。重富浦に碇泊させていた薩摩蒸気船三艘を異人たちが曳航していった後であった。重富の人たちは大変残念がり、「持聲をあげ只々足踏ミいたし居候由」だったという。蒸気三艘が桜島まで曳航され程なく二艘から煙が上がったが、遠方であるためそれが夷船か薩摩船かは判別できなかった。

白金坂を越えて鹿兒島城下へ急ぐうち、坂下あたりで大砲玉が頭上を掠め大騒音を立てのには驚いた。大砲の玉は「石ニ当り打碎ケ、其割レ足本江コロケ参り、瓦之割レ之様ニ相見ヘ」た。鹿兒島城下に入ると城下は大騒ぎで、大砲玉があたりこちらに飛び散っていた。高木は城下に残り、志賀はそのまま直ぐに高岡に帰ったという。

当月二日、高岡年寄役長野助兵衛や組頭役市来仲左衛門たち七人が高岡を同道出立し、途中川止めに遭いながらも四日に鹿兒島に到着した。仲左衛門が六日に認めた書状が、同行した家来によって九日夜に届けられた。それによると夷船が出帆した後で、鹿兒島城下は悉く焼失していることが認められていた。山川沖にはまたしても夷船一艘が見えたとの風評があるが、実否は分からないので分かり次第知らせるか、自分が帰郷することになると申し送っている。

九日、都城から高岡への知らせでは、去る四日に夷船は山川を退去する際に、うちの一艘が大破している様子で山川沖へ残し置

き、別に一艘が現れたということであった。翌十日に仲左衛門の家来が夜前に鹿兒島から帰着し、市来善助宅で報告があった。鹿兒島城下上町は琉球館から冷水まで残らず焼失し、白金坂下通町が僅かに焼け残ったという。下町は以前に焼き払われたとの専らの評判であったが、六日に市来家来が帰郷するまでは取り払いはなかったらしい。家財道具は悉く片付けられており、町人たちは思い思いに知人先に避難したようであった。

夷船から打ち出された玉を割ってみると、内に小玉が六個入っており、その玉内に塩硝四斤宛込められていた。この塩硝は薄白で焼灰のように見え、仲左衛門が水に浸して絞り火を付けたところ「シヤリ〜」と燃えたという。

下町台場では大砲方の二人が被弾して「身軀ミジンニ」なり、「側ニ居人之陣笠ニヒツ付候肉ノ切れ而已残り候由」と生々しい戦況を報告している。夷船に向けられた大砲筒先口には異国の玉が打ち込まれ、筒は裂けてしまったという。大砲の玉が飛んでくる時は真っ黒に見えるので、横に避けるか地面に伏せて凌いだ。そのため怪我人は少なかったという。

異人の死骸三体が海から上がった。一つは前濱辺、一つは磯之御茶屋下辺、もう一つは加治木か重富とか聞いたがはっきりしない。前濱に上がった死骸は下町広馬場に曝されていた。身長は七尺程で上半身だけ「スツホウ」を着し、胸のボタンを留めていた。「帆木綿」のような品に見え、下半身は下帯も着けていなかった。磯之御茶屋に上がった死骸は、「スツホ袖・モ、引様之品」を着しており、品柄はよかったとしている。

六日に認めて鹿兒島から宿元に送った仲左衛門の書状では、異国の大砲玉は厚み一寸三分程の鉄製で重く、玉丸では二尺七八寸回りもあるかと見受けられるという。

⑤高岡町船主外山弥兵衛の話

十日に弥兵衛が市来善助宅に来て話すには、自分船を鹿兒島に廻送して荷物を仕廻し出帆しようとしていたところ、二日鹿兒島表の戦闘で自分船を含め多くの船が破損した。その数は分からないが、福山表へ廻った二艘だけが無事との知らせがあったという。

⑥花ヶ島郷士猪股勝之助の聞合

佐土原へ鹿兒島からの飛脚が向かったので、猪股勝之助を聞合に佐土原へ遣わしたが、四日に夷船が鹿兒島を退帆し、その後連絡はないということであった。佐土原では「何事も不申聞、役方町在末々まで皆々口留ニ而、津口く、ニ番人相付、御城内夜廻り上下三拾人位にて火之廻相始り候よし」と箝口令が敷かれているようで、城内では夜廻りが始まったとしている。また日々佐土原から鹿兒島へ米一〇〇〇駄位宛が送られているという。

⑦長州豊浦郡定吉の話

定吉は長州豊浦郡の者で、高岡の外山弥兵衛船稲吉丸に乗り込み、鹿兒島で薩英戦争に居合わせていた。その後定吉は宮崎郡上別府村を通りかかったところを、同村庄屋松浦市蔵に聞かれて語った話は次の通りである。

佐土原にあった伊東三位入道(伊東義祐)が鑄造させたという釣鐘を、弥兵衛船で薩摩へ運ぶために上野町にあった薩州炭勘場に寄って炭を積込んで赤江川を出帆した。六月二十二日に鹿兒島

山川湊に着船し、二十七日に同所を出帆。知林岬(島)を通過すると後方に夷船七艘が見えた。二・三里も乗り行くうちに夷船先へ乗り抜いて、ともに谷山沖に汐溜した。翌二十八日早朝、夷船は出帆して桜島沖へ留まった。二十九日は小船で乗り廻っていたが、翌日は大風雨のため目立った活動はなかった。

二日早朝、二番手の夷船二艘が重富へ行き、同所に碇泊していた薩摩蒸気船三艘を桜島沖へ曳航した。四ツ時頃か、鹿兒島台場および桜島台場から大砲を打ち出し、夷船もそれに応戦して大砲の撃ち合いが始まった。そのうち薩摩蒸気船三艘は焼失したと見られた。弥兵衛船も戦渦に巻き込まれて焼失し、琉球船四艘もまた焼失した。

翌三日は夷国船があちこちへ大砲を打ち出したが、薩摩から打ち出すことはなかった。四日四ツ時頃、夷船は大砲を打ちながら出帆し、沖小島脇を通過する時同所高所から打ちかけた砲弾のうち一つが夷船一艘に命中し、怪我人も出たがそのまま出帆した。

鹿兒島の死人は一人、怪我人は一二人ということだった。定吉らは十日に鹿兒島を出立して帰郷したが、「其節者狼狽居候ニ付不覚処も御坐候」としながらも、この定吉の話を市蔵が宮崎役所に報告したのである。宮崎役所では、このほかにも「手寄」を頼って探索が続いているが、「兎角秘し候様子ニ而、何分駢与相訛不申」と探索活動の困難さを訴えている。

⑧薩州泰寿丸徳治の話⁹¹⁾

七月十日に薩州山川を出帆し、同十三日に島野浦に入津した薩摩藩領の砂糖船二千石積船泰寿丸の徳治が、鹿兒島で見聞きした

薩英戦争についての経緯を、出役中の延岡藩役人が聞き取った内容である。

英国艦隊七艘が鹿児島へ渡来したのは六月二十八日のことである。風聞では米・賠償・金・琉球国を要求など「無理成願ひ」であったため、薩摩藩が評議中であつたのか、七月一日に鹿児島城下より四・五里隔てた加治木の船囲いに避難していた薩州蒸気船を、英国人たちが「我俣ニ」蒸気船で乗り付けて拿捕し曳航していった。

その際薩州蒸気船には士分二人と、ほかに少人数の水主が乗船していたが、英国人は三〇〇人程も乗り付けてきた。少勢の番人たちは必死の覚悟を決め、事前に用意しておいた塩硝蔵に火を付けた。当人は勿論、英国人三〇〇人ともに「火死」した。船底は海中に沈み、死骸の首や胴・手足が海に散乱したという。

これを機に双方から砲戦になったが、陸地から打ち出した砲丸は英国船にたとえ命中したとしても損害を与えるほどではなく、逆に英国船から打ち出した砲丸は、石築堅固な台場でも三・四尺くらいも土中に打ち込まれた。戦場は主に桜島近辺であり、遠くは一里半、近くでも一里くらいなので、薩摩軍からも長さ二間くらいの大砲で打ちかけたが、英国船の横腹に当たった時は「却而跡江戻」るだけで、無意味であつたという。

薩州の台場からは打口を交えるなどして砲発し、一日・二日と砲戦したが、英国艦隊は不意に出帆していった。その際に沖小島という小高い場所から、砲術師範某が大砲七〇挺を下に向け一同に砲発したので艦隊は櫓を打損じられ、そのまま沖へ出帆した。

破損の著しい一艘を残して六艘は出帆したが、翌夜に別船が来て連れ去つたらしい。

塩硝蔵に火をかけて英国人三〇〇人を「火死」させたというのは全くの「訛言」であるが、さらに次のような話も語られている。

一 桜島江野菜盗取として小船ニ而英人十六人上陸し、農女にも可有之哉取押、彼是時刻相移候中、外百姓とも右船砂中江埋メ、右十六人取囲ミ生取候処、其後礫ニ相成候よし

野菜を盗みに来た英国人一六人を生け捕りにして、礫にしたというものである。英国人に対する民衆の憎悪を伺うことができるが、これもひとつの「訛言」であることは言うまでもない。

延岡藩用人忍左司馬ら上下四五人が、「宮崎表御取締」として延岡を発ち宮崎に向かったのは七月八日のことである。⁽⁹²⁾

七月十七日には薩摩藩から正式に事件の内容が伝えられた。⁽⁹³⁾

御城下海江、去月廿八日英国船七艘渡来、種々申立趣御座候而、曲直被為致分解候央、去ル二日五里程隔候所江繫被置候御手船蒸気船引出、不法之任形有之候ニ付砲発被為掃据候処、翌三日致出帆候旨、為御知申来

英国船が薩摩蒸気船を引き出して不法を働いたので砲発し、「為掃据候」したため翌三日に出帆したことになる。

これをうけて延岡藩は、七月二十二日に取次役の堀兵庫を「攘夷御祝御見廻」の使者として鹿児島へ派遣した。⁽⁹⁴⁾ 薩英戦争は、延岡藩にとってはまさに「攘夷」決行であつたのである。

三 都城島津家からの聞合

鹿兒島城下の新橋下手・豎馬場口にあった都城鶴江崎屋敷は、浜辺に面し、左に祇園洲台場、右に新波止台場があった。屋敷詰の富松源太郎は、六月二十七日の英国艦隊来襲から十二日までを詳細に整理・記した「英国軍艦渡来打払一卷」⁽⁹⁵⁾を著している。これは、なかには「風説」も混じるものの、原則として源太郎が番所や軍役方に聞合させた内容であるのに対して、薩摩藩が回答・説明したものである(第3表参照)。なお、本人が直接見聞きしたものは略した。

六月二十七日七ツ半過ぎ(午後五時頃)、夷船渡来の合図として沖小島および桜島赤水から大砲五発、それに応じて祇園洲と大門口台場から合図の大砲が打ち上げられた。源太郎が番所へ駆け付けたところ、程なく留守居河野易左衛門から役所より下津畑辺りへ聞合に行くよう命じられ、下町広小路下会所へ出向いた。津畑に出役していた軍賦役衆の折田平八に面会したところ、夷船はまだ姿を現さず届けも無く、よく分からないとの返事であった。九ツ時分(午前十二時頃)源太郎は軍役方へ出頭し、谷山からの注進内容を問い合わせたところ、谷山のうち障子川沖へ夷船七艘が汐掛しているとのことであった。夷船襲来の報は、都城へは八ツ時分(午前二時頃)に守衛方詰渡辺源助によって陸路早馬で伝えられた。

二十八日、軍役方には山川から急報が届いており、昨二十七日七ツ時分に山川へ夷船七艘が乗入ったので、小船で乗出たところ

夷船は速度が早く近づけなかった。四ツ時分後、夷船七艘は前之浜へ来着し、小船で磯周辺を測量しているようであった。夷船着船後直ぐに津畑出張軍役方へ聞合うと、折田らが夷船に乗込み、夷船が英国船であること、持参した書簡を受け取ったが返答を急ぐよう要求されたということであった。ここでは書簡の内容(要求)は記されていない。飛脚たちが英国の要求内容まで入手できるルートを持っていたことは驚きである。

都城一番組手安山隆左衛門ら計一四〇人程が鹿兒島に到着したのは、二十九日のことである。都城家は南林寺が出火した際の消火を命じられており、七ツ時より消火方掛指宿清右衛門らが持場に配された。七月一日には、当主元丸の陣代として先代久本三男の北郷具次郎(資恭)⁽⁹⁶⁾が鹿兒島に到着した。都城屋敷は海岸沿いにあるため、出火に備えて屋敷の玄関前・書院・庭へ龍吐水が配置された。

翌二日、源太郎が軍役方に聞合したところ、重富に繫泊していた薩摩蒸気船三艘が夷船に奪取されたと注進があり、それを機に戦闘が始まったという。都城島津家の持ち場は台場ではなく、「御屋敷ニハ火消ヲ第一と心掛」とあるように、南林寺に加え城下上町出火時の消火作業が中心であった。そのため二日の記事は消火活動に関する記述が多く、生々しい戦闘場面については、実際に戦闘現場にいた薩摩藩兵からの伝聞に拠るところが大きいと思われる。戦闘状況を記した内容は次の通りである。

物主島津権五郎様、ことの外勇壮に有之候与申事ニ承及候、
^(本ノマゴ)衣ニ者税所清太様と申人、大砲筒先はつれ候玉かたさきに

あたり即死之由、たんととふの重久甚五郎様と申人者、小ひんにわれ玉こもり、五六日目ニハ死去之由

このように、飛脚たちが語る戦闘での戦死状況は、台場で戦う兵士たちから聞合したものであったと思われる。なお祇園洲台場堅であった税所清太には、藩より軍償として切米八石と祭祀料金三〇両が下賜されている。

このほか激戦の様子として次のように記録している。

一此節一番の痛所者、築地明神宮之御宮、祇園之洲御台場打はつれ候玉いくらとも参り、大松之真中杯打通打折驚入次第、御宮も大いにいたミ、白馬の作物打クヤシ候（後略）

一御城内へ者大砲玉上の山ニ者幾ツも参り候由、大奥の辺江式ッ位ツ、落候由、表之方へ者落候咄不承、御木屋場門方少シ肝付家之方江大砲玉壺ツ落、其玉すへり御楼門右脇の石垣ニ当り、御楼門柱ニ当り候てみちんニ相成候由

一入来御屋鋪・垂水御成御門前右石垣一間計掛玉まへり打クヤシ、其玉垂水御成御門江当り、夫方みちんニ相成候

一南林寺ノ内魚ノ掛ケ有之候処江、侍衆杯打寄めしとも給候処へ玉参り、両三人者みちんニ相成即死之由

これらは源太郎が実際に見聞きし、または伝聞によるものであるが、「みちん（微塵）」と表現されているように、戦闘の激しさが伝わってくる。

大砲打方は翌三日も続いたが、夷船は前之浜を出帆した。

種子屋敷前ニ而異船方大砲打方いたし候へ共、此御方二者大砲御取やめ、陸戦之御手当有之候由候へ共、上陸いたし候模

様無之、しはらくの間きひしく打方いたし候而、前之浜出船

ニ及候ニ付、大門口并訓練場御台場方者打方有之候由

出帆する異船を目掛け、沖小島から砲撃したことについては次のように記す。

沖小島ニ而青山家頭取ニ而百人位之打手ニて打方有之、此御台場高ミニ而船之内江打込候故、異船ニもしのきかたく、口ヲコ打ぬき候と相見得、湯煙のことく上り候由

七月四日、谷山からの知らせでは、破損船は和田浜の先のクツワ崎に船掛して修繕しているようであった。「祇園洲御台場より柄梶杯うたれ、又者沖小島方之大砲ニ余程いたミ候との風説有之候」とあるように、沖小島からの砲撃が軍艦の一艘に大打撃を与えたことは、薩摩軍にとって会心の一撃であり、この内容が脛炙して各書物に記されたものと考えられる。

翌五日、軍役方を訪ねた源太郎は「遠目かね」で見るとう勧められ夷船を見るが、「最早蒸気取立出船之も様ニ候」と出船したことが確認できた。浜台場からの注進では、夷船七艘のうち二艘が「もやい（繋ぐ）」していることが見受けられ、「此船者いたミ候船」であることが分かった。根占および指宿から、夷船一艘が小根占に汐掛しており、六日夜中に迎船に曳航されて出帆していったことが注進された。八日、都城一番組手の安山隆左衛門一手、翌九日には龍岡傳五左衛門一手がそれぞれ都城に引き揚げた。夷船が去った後、祇園洲へ唐人とみられる一人の遺体が打ち上げられ、谷山へも一人の異人の遺体が上がったという。異人の死体は「広小路江しはらくさらし」、また諸所の漁網にも遺体が掛

かったが、そのまま取捨でたという風説を書き留めている。

結びにかえて

文久期以降、英国艦隊襲来の危機・緊張感が高まり、諸藩には領内のみならず近隣幕領も含めた海岸防備強化が要請された。文久二年八月二十一日に起きた生麦事件の賠償問題を薩摩藩と直接交渉するため、翌三年六月二十二日、英国艦隊は横浜を出航し二十八日朝、鹿児島城前面の前之浜に到着して危機は現実となる。周辺諸藩は、この英国艦隊の鹿児島襲来という情報を、どのような手段・ルートで入手し把握したのかについて、薩摩藩と藩境を接する飢肥藩と延岡藩を対象に検討してきた。いままで明らかにしたことをまとめ、結びにかえてい。

まず情報の入手ルートをみると、飢肥藩では鹿児島から帰郷した足軽や飛脚・飛脚問屋・串問「土民」から、場所では交通の要所である寺柱や高岡で情報を入手している。飢肥藩では相談中(のち家老)平部嶠南がその人脈を最大限に駆使し、幕府情報は幕府儒官である恩師安井息軒から、また薩英戦争での戦闘状況については同門の加治木士邦永仲之進から、普段入手できない情報を入力している。

これに対して延岡藩宮崎役所でも、江戸・大坂藩邸や日田郡代などからの公的な情報のほか、高岡馬喰や同郷士、倉岡郷士、高岡船主などの薩摩藩領の外城、また宮崎上野町に置かれた薩摩藩勘場などから情報を入手している。例えば、高岡郷士志賀清右衛

門は英国艦隊襲来の報を受け、直ちに鹿児島へ急行して実際に自分で見聞きしているが、帰郷して城下の様子や被害状況を諸藩に伝える役を果たしている。

諸藩にもたらされる情報は、「手寄」の者が実際に現地で見聞きして入手したものや、飛脚などからの伝聞など多様なルートがあったことがわかる。なかには「訛言」の類や、数字的に過大なものもあるが、「空言」のようなものは少なく現実的な内容であった。また情報ネットワークの拠点として、交通の要所であり「関外四カ郷」最大の外城である外城高岡郷は、都城や佐土原とも密接な関係を持つなど、鹿児島―都城―高岡―佐土原というルートで情報が伝達・共有されるとともに、周辺諸藩への情報発信の拠点として位置づけられるのである。佐土原藩などでは情報発信制限が加えられたりもしているが、高岡とは飢肥領清武や延岡領宮崎などと日頃から交流が盛んであり、情報交換と共有がなされていた。慶応三年の日向幕領預りや、明治三年の日向四藩会議開催を待つまでもなく、情報共有を通して藩境を超えた情報ネットワーク圏が形成され、新しい地域社会が成立しつつあったのである。⁽⁹⁸⁾

註

(1) 高部淑子「日本近世史研究における情報」『歴史評論』六三〇―二〇〇二年)二八―三〇頁。

(2) 宮地正人『幕末維新期の文化と情報』(名著刊行会

- 一九九四年) 一四〇二頁。
- (3) 「幕末期の鹿児島藩と情報収集」(『黎明館調査研究報告』第11 鹿児島歴史資料センター黎明館 一九九八年)
- (4) 「幕末薩摩の情報収集」(『玉里島津家史料四』月報4 鹿児島歴史資料センター黎明館 一九九五年)
- (5) 「幕末薩摩外交―情報収集の点からみた薩長同盟―」(『黎明館調査研究報告』第29集(鹿児島歴史資料センター黎明館 二〇一七年)
- (6) 薩英戦争については公爵嶋津家編纂所『薩藩海軍史』(薩藩海軍史刊行会 一九二八年)をはじめ古くから数多くの研究があり、二〇一三年には薩英戦争一五〇年を記念して、尚古集成館が特別展「薩英戦争百五十年―前の浜の戦―」を開催している。
- (7) 『日本歴史地名大系四六巻 宮崎県の地名』(平凡社 一九九七年) 四四七頁。
- (8) 『宮崎県史 通史編 近世上』六九二頁。
- (9) 野口逸三郎「解題」(平部嶠南「六郷荘日誌」 青潮社 一九四八年)。
- (10) 『宮崎県史 通史編 近世上』一六三頁。
- (11) 明治二年「竈敷石高人別調帳」(内藤家文書『宮崎県史 史料編 近世1』)
- (12) 拙稿「幕末期譜代延岡藩の風聞探索活動―文久二年「風聞書 乾坤」を中心に―」(『宮崎公立大学人文学部紀要』第28巻第1号)。
- (13) 芳即正『島津久光と明治維新―久光はなぜ討幕を決意したのか―』(新人物往来社 二〇〇二年) 一〇五頁。
- (14) 石井孝『増訂 明治維新の国際的環境』(吉川弘文館 一九八八年) 一六二頁。
- (15) 前掲(13) 芳即正 一〇七頁。
- (16) 町田明広『幕末文久期の国家政略と薩摩藩―島津久光と皇政回復―』(岩田書院 二〇一〇年) 一五七頁。
- (17) 前掲(13) 芳即正 一〇八頁。
- (18) 前掲(14) 石井孝 一六八―一七二頁。
- (19) 前掲(13) 芳即正 一〇五頁。
- (20) 芳即正「幕末薩摩の情報収集」(『玉里島津家史料四』月報4 鹿児島歴史資料センター黎明館 一九九五年) 三頁。
- (21) 前掲(16) 町田明広 一五七―一五八頁。
- (22) 芳即正「幕末薩摩の情報収集」二―三頁。
- (23) 前掲(16) 町田明広 一五八頁。
- (24) 平部嶠南「六郷荘日誌」文久三年三月五日―九日条(青潮社 一九七八年)。
- (25) 佐々木克「幕末政治と薩摩藩」(吉川弘文館 二〇〇四年) 二二七頁。
- (26) 前掲(16) 町田明広 一九四頁。
- (27) 万延元年に隠居した嶠南が飢肥城の西方、石原坂に営んだ山荘(『六郷荘日誌』解題)。
- (28) 前掲(12) 拙稿。
- (29) 『都城市史 通史編 中世・近世』(都城市史編さん委員会編

- 集都市市 二〇〇五年) 一一九四～九五頁。
- (30) 「六鄰荘日誌」文久二年五月四日条。
- (31) 薩摩藩領日向国諸県郡の支配は外城制によって行われ、外城には武士(衆中)が居住して組頭が各組を率い、城下士から任命された地頭に統率された。延享期以降、日向国諸県郡の外城は一九、私領都城領一の計二〇を数えた(『宮崎県史 通史編 近世下』一五七～五八頁)。
- (32) 『宮崎県史 通史編 近世下』二六一頁。
- (33) 「六鄰荘日誌」文久二年五月五日条。
- (34) 「六鄰荘日誌」文久二年五月七日条。
- (35) 前掲(25) 佐々木克八八頁。
- (36) 「六鄰荘日誌」文久二年五月十日条。
- (37) 「六鄰荘日誌」文久二年五月二十一日条。
- (38) 「六鄰荘日誌」文久二年五月二十九日・六月九日条。
- (39) 「六鄰荘日誌」文久二年六月二十一日条。
- (40) (41) 「六鄰荘日誌」文久二年七月十六日条。
- (42) 「六鄰荘日誌」文久二年七月二十三日・八月二十三日条。
- (43) 「六鄰荘日誌」文久二年八月二十六日条。
- (44) 「六鄰荘日誌」文久二年十月六日条。
- (45) 「六鄰荘日誌」文久二年十一月朔日条。
- (46) 「六鄰荘日誌」文久二年十二月十九日条。
- (47) 『新訂増補国史大系 続徳川実紀 第四篇』(吉川弘文館 一九九一年) 四六六頁。
- (48) 「六鄰荘日誌」文久三年正月四日条。
- (49) 「六鄰荘日誌」文久三年三月五日～九日条。
- (50) (51) 「六鄰荘日誌」文久三年三月十六日条。
- (52) 「六鄰荘日誌」文久三年三月十七日条。
- (53) 『宮崎県史 通史編 近世上』七八二～七八四頁。
- (54) 文久二年「風聞書 乾」(内藤家文書第一部二九維新一四〇)。
- (55) 「風聞書」(内藤家文書第三部二〇維新一七六)。
- (56) 前掲(29) 『都城市史』一一九四～一一九五頁。
- (57) 文久二年八月十九日「萬覚書」。
- (58) 文久二年八月廿日「萬覚書」。
- (59) 文久二年九月廿七日「萬覚書」。
- (60) 文久二年八月廿一日「萬覚書」。
- (61) 文久三年三月廿三日「萬覚書」。
- (62) 文久三年四月八日「萬覚書」。
- (63) 文久三年四月廿二日「岩城・延岡萬覚書」(第一部一〇岩城・延岡覚帳一〇四)。
- (64) 拙稿「小藩分立」から地域統合へ―幕末維新时期における日向諸藩―(『地方史研究協議会編『南九州の地域形勢と境界性―都城からの歴史像―』雄山閣 二〇一〇年) 一九一～一九二頁。
- (65) 文久二年十一月十四日「萬覚書」。
- (66) 「六鄰荘日誌」文久三年七月二日条。
- (67) 前掲(29) 『都城市史』一一〇三頁。
- (68) 文久三年亥年「英国軍艦渡来打払一卷」(都城島津邸所蔵史

料一四一)。

- (69) 「六郷荘日誌」文久三年七月三日条。
- (70) 「六郷荘日誌」文久三年七月六日条。
- (71) 「六郷荘日誌」文久三年七月九日条。
- (72) 「六郷荘日誌」文久三年七月八日条。
- (73) 飛脚問屋が情報収集の拠点となることについては、宮地正人『幕末維新期の文化と情報』(名著刊行 一九九四年)、巻藤隆「上州の飛脚問屋について―輸送・金融・情報―」(地方史研究協議会編『交流の地域史―群馬の山・川・道』雄山閣 二〇〇五年) など。
- (74) 『宮崎県の地名』(日本歴史地名大系46 平凡社 一九九七年) 六二五～六二六頁。
- (75) 「六郷荘日誌」文久三年七月十日条。
- (76) 文久二年三月「不穩世上隣国所々窺手控」(内藤家文書第三部二〇維新一五一)。
- (77) 前掲(25) 佐々木克五五頁。
- (78) 「六郷荘日誌」文久三年七月二十七日条。
- (79) (81) (83) (84) 「六郷荘日誌」文久三年八月六日条。
- (80) (82) (85) 「六郷荘日誌」文久三年七月十日条。
- (86) 林匡「薩摩藩家老の系譜」(『黎明館調査研究報告』第27集 鹿児島県歴史資料センター黎明館 二〇一五年) 一三三頁。
- (87) 前掲(13) 芳即正一一〇頁。
- (88) 「諸呂控日記帳」(宮崎市大字浮田西 渡辺邦夫家文書)。
- (89) 「薩州鹿児島嶋江異国船渡来ニ付風聞書」(内藤家文書 第二部 一〇維新五)。
- (90) 史料中に「かんき与八下町方鍵之手ニ築出し御座候場所ニ御座候」とある。
- (91) 七月一四日嶋浦江出役中間書(内藤家文書第三部二〇維新一五二)。
- (92) 文久三亥三月「御軍備覚書」(内藤家文書第一部二九維新一〇)『宮崎県史 史料編 近世二』所収。
- (93) 文久三年七月十七日「岩城・延岡萬覚書」。
- (94) 文久三年八月九日「萬覚書」。
- (95) 文久三亥年「英国軍艦渡来打払一卷写」(都城島津邸所蔵 史料一四一)。
- (96) 前掲(29)『都城市史』一二〇二頁。
- (97) 前掲(13) 芳即正一〇九～一一〇頁。
- (98) 前掲(64) 拙稿二〇二～二〇三頁。

幕末期薩摩藩をめぐる諸藩の探索活動 一文久二～三年、薩英戦争前後を中心に― (大賀郁夫)